

方向性詩篇

大谷良太

一一〇一丁一一〇一一一

方向性詩篇

目次

海峡				じやあね
			秋冷	12
			洪水伝説	
		対話ノート		
56	50	百年	ひと汗	18
	48		24	10
		30		
			20	
52				

2018.5.13 Bloody Sunday

カーテン						
凍る地方から						
暫定的生活						
草木の戦記						
美しい村						
地上の人						
廃墟						
地獄 ^{ヘル}	76	74				
シェパード						
dandelions						
劫火	96					
チューインガム	98	94	92			
supernova	102					
				72	70	
				66	64	
						60
						62

I

じやあね

菜園が手入れされ収穫されて行く様子を
金網越し見てるひなた

おどけた君の口覗く白い歯が
堪らなくエロチックだ

滴つていないので滴るしづく
イメージが淡い藤棚を揺らして。

ごらん、便覧のうたを

何故躊躇っている “じやあね”

柔らかい横腹にキスを浴びせたら

僕のバツシユも笑いながら駆けて行く

二人だけ、可愛い膝小僧になつてさ、ああ、
切ない我らの日々、^婦^被浸かれたらしいのにな

過り降つて

夏至を志す

君としたこと、全部憶えておく、じゃあね、
じゃあね、坂道を下つてく

洗い残した皿の脂に

溜つたひかりみたいだ。

根気強く思う。——根気、

つよいと思う。じゃあね、

じゃあね、——君がペダルをゆつくりと漕いで。

有り余る不滅を僕たちは駆けてく

よく冷えたゼリーのような熟柿を啜る午後、

寺院ではなく聖堂の鐘が鳴り、

俺の把持した販路もまた、猫の瞳のように澄んでいる。

俺たちは鞆に財布を入れ、パスポートをひとつところに仕舞つた。

目やにの酷い子供が誰に似たのか、そんな話をしている。

急坂の多い都市の、

きつい勾配の上の、

林立した白いアパート。

俺はタツチパネルで彩色されたグラフたちに指示を発し、

君は裏手の山の遊歩道を窓から見降ろしている。

“鶲”――昨日見たあの黒い鳥の名前を、

ふつと思いつ出しながら、自分は、

別のこと、別の思考を考えていた。

冷蔵庫のメモを見上げながら、運河沿い、

此処ではないと言つた、

あの日の君へ。

*

聖堂の鐘が鳴り響き、此處ではない、
此處ではないと知つたよ。

アジアの一千万都市にいても、

帰りたいと思う先史がある。

この頃じや、尻の先に

見えないしつぽが生えていたらと思う。

あの裏山を歩いているとさ、茱萸ケミも木苺スノコもあつて、
ジユニがひどく喜んで拾つた。

国境を越えて、大量の書籍たちも

箱詰めして安く送れればいいのにな。

山道さんどうを登り詰めた先に小さな寺があり、
無料でプレートに昼飯ふるまを振舞つていた。

日本じや見ないくらいの大きなダンプが、
やはり急坂の砂利路を上つて来て、

草木が擦れる脇で、俺はジユ二を抱え上げる。

帰りたいと思う時代。

此処じやない場所。

アパートから見える夕刻のビル群を、

白いノートに留めようとして、

二重窓に映り込んだ君とジユニの姿を、

俺は脳裏にはつきりと刻み付けていた。

*

秋冷の鐘が鳴り響き、

地上を渡つて行く鶴。

あの黒い鳥は、俺たちが散策する都度、
必ずあの裏山の遊歩道で出でくわ
会した。

落ち葉を踏む度にかさかさと音を立てて、
ジユニが黄葉を拾い集める。

複雑なソウルの地下鉄の、

カラーリングされた路線図を、

俺は自分の販路に重ね合わせる。

子を連れて、LCCのエコノミーで、

帰りたくもない故国に帰る。

仁川^{インチヨン}に向かう途中で、斜め後ろから

車窓に橙色の朝陽が差し込んで来た。

君のお父さん^{アボニーム}の運転する車は、

時速百キロを超えて高速を走行する。

心を掠つてゆく軽さに俺は苦しむ。

別な生き方、別の方角を模索しようとして、

だが、俺の足はふわふわ踏み留まる。

君は黙り込み、ジユニも不機嫌だ。無理もない、

朝晩の冷え込みで、ジユニは風邪を引いたのだろう。

梢を渡つて行く鵠^{カササギ}。漢江^{ハングン}。白いアパート。

聖堂の鐘が鳴り響き、熟柿を啜りながら、

此處^{ここ}ではない、此處^{ここ}ではないと知つた。

そう、俺もこの旅で初めてそつと触れたんだよ。

洪水伝説

今日、慌しく彼女が出勤した後で、
私は壇詰めを小箱に梱包し、

宅配の集荷を自宅で待ちながら、

詩が降りて来ないか、と台所で唸つていた。

十一月十九日——結婚の記念日だが、
生憎すっからかんの私の財布だ。
あいにく

宛名書きが二枚テーブルに並べられ、

私はP Cを前に唸つている。

詩が降りて来ないか、詩が降りて来ないか。

生姜茶と葱醤。千葉県と長崎に宛てたラベル。
センガンチャ
バジヤン

詩は降りて来ないで、時間だけが降りて来る。

誰もいない部屋を思つてゐるのだつた。或いは、

誰もいない部屋を思う空白に似ていた。

行つたり来たりする私の思惟よ。またも書きあぐねて、

クリアファイルをペラペラ触れたりしてゐる。

生姜茶と葱醤。センガンチャ
バジヤン。千葉県と長崎に宛てたラベル。

やがて詩が降りて来る。——呻吟し、夜を徹する者に。

PCを前に唸る私の後ろで、壁に凭れ、

彼女は毛糸を編んでいる。

今日、慌しく彼女が出勤した後で、

集荷人が来て、私は壇詰めたちを発送した。

それらは神々しい、十一月の記念日だつた。

対話ノート

昼飯に使つた皿を洗いながら、取り留めのないことを思つてゐるのだつた。窓外の大気は温み、春らしい光が室内にも届いた。猫たちはそれぞれの場所に隠れて眠り、家には私一人だつた。十四時過ぎ、空っぽの郵便受けを見に降り、エレベーターでまた五階まで上がつた。これと言つてすべきこともない、平日の午後だつた。

昨日、韓国語の授業からの帰り道、道端に羽を傷めたカラスが、脚だけで飛び跳ねていた。私は椅子に座り、テーブルに頬杖を突きながら、あのカラスはどうなつたろうと思つた。羽を傷めたのでは、そのままでは、鳥として生きて行ける筈もなかつた。カラスを自治体は保護するのだろうか。私には分からなかつた。また、もつと昔、ジュニがまだベビーカーに乗るくらいの赤ん坊だつた時のことを思い出した。ミンジュと道を歩いていて、近所の幼稚園の脇に、雀の雛が落ちていたのだ。この時は私たちは慌てて、市の動物保護センターに連絡を取つたが、

雀は保護の対象ではなかつた。親鳥が近くにいるかも知れないと思つて、私たちは振り返りながらその場を離れた。

コーヒーを淹れるための薬缶を火に掛け、換気扇を回してメビウスを燻らせる。様々な思ひが胸を擦過するのを感じる。温かい思い出もあり、しかし、不快な思い出も決して少なくない。マグカップを啜りながら、そんな思い出たちを点検する。

或る大雪の日を思い出した。私は窓に寄り、ひつきりなしに降る雪を眺めていた。隣に、もう忘れた誰かがいて、会話していた。その頃、毎年のように厳しい寒さの冬が続いた。その部屋は空調が効いてとても暖かだつた。どんどんと積つて行く庭を眺めていた。まだ昼で、部屋の明かりは点けていなかつた。薄暗い天井。私たちは昼間から雪見酒をしていた。此処まで思い出して来て、肝心の相手を思い出す。彼は独学でハングルを勉強していた。韓国語は日本語に似ている、と彼は言つた。パッチムの仕組みを説明してくれた。が、私には彼の言うことが何も分からなかつた。ちゃんと韓国語を習うようになつた時、彼の驚きを私も知るようになつた。

時計は十五時半を指し、今、ドアの新聞受けに夕刊が投げ込まれる。乾いた洗濯物を取り込

み、なかなか暮れて行かない午後を眺めていた。漠然とした不安の中で、自身の経験と記憶を頼りに、はつきりとした希望を書き留めること。それが何処まで可能なのだろうか、私はぼんやり考えていた。先週末、子供たちと訪れた広い芝生でフリスビーを飛ばした、あの白いフリーを思った。悠然と軌道を描き、それは真っ直ぐに飛んで行つた。

ひと汗

自分の頭の斜め上で、人差し指をくるくると回しながら、

「これでつか？」と運転手が僕の家族に尋ねる。

そうしてタクシーを駆前から走らせて登る、きつく長い坂道の上に、
僕の目指す精神科長期入院病棟がある。

かつて「ルナティックアサイラム」と呼ばれていた。

「ルナティック」ってどんな意味だろうか？「アサイラム」は多分、収容所だ。

一時期僕が上の子を通わせていた、

朝鮮初級学校も、とてもきつい勾配の上にあつた。

子供と歩いてその坂を登り詰めた。

あの日々は自分にとって、どんな思い出なんだろう？

子供にとつて、どんな思い出になつたんだろう？

幼い子供たちの通う学校^(ハッキョ)の前の道路に、

横断歩道さえ整備させない、この不思議な社会の構造つて？

僕はきっと「差別」のことを考えたくて、でももつとそれ以前の、普段人が向かうことあまり思わない、坂道の上にあるもの一般を漠然と考えている。そこに向かうことや通うことを、日常や日課に組み込んでいる、そんな人たちのことを、ぼんやりと考えている。

「ルナティックアサイラム」とやらについて言えば、

「これでつか？」と指をくるくる回す

そんな運転手はもう殆ど、現実にはいたりしないのさ。

安岡章太郎の『海辺の光景』の中に、

似たようなシーンが確かあつたな、つて時々思い出すだけさ。

最早かなり古くなつたあの小説と、

今も坂の上にあるいろいろな建物、いろいろなイデーとの関係。

僕はやはり僕なりの仕方で、「坂の上」を自分に繋げてみたいんだろう。

学校が坂の上にあつた、その「ウリハツキヨ」は今もちゃんと坂の上にあるよ。

ほんのひと汗の努力なんだよ。

少し馳せるだけで到達可能な、きつとこれは「思い」の持ち方の問題。

そんな、努力ですらないのかも知れない、僕にとつてはやはり漠然としたままの永遠に「ひと汗」の問題。

だんだん暮れてゆく光の中で、家々に灯がともり、
俺はこの光たちが揺れている地上を、

いつ、どこで、眺めたんだつけかな、と思う。

目の前に開けた暮れ方の田んぼを、

田んぼの中の一本道を、軽トラックが走り去つて行く。

俺は長い棒切れを、杖のように持ち歩いている。

思い出せる夜のフライト。——この先、

自分がまたあの景色を眺めることがあるのかな、と思う。

オリンピック大路。^デ^ロ光り輝く南山タワー。

ふたつの懸け離れた都市を、

大きな別の河が流れて行く。

俺が首からぶら下げた電話から、

今も微かな会話が鳴つているような気がする。

自分が歩く田んぼの向う、

堤防の上を滑つて行く車列のライトが、
きらきらと数珠つなぎになつて。

信号が変わる度にそれは動いて。

横たわっている浅瀬の底、

砂金のような光の粒を集めて、

眩しい束を束ねたい、と思う。

冷たい流れに手を浸すみたいに、

今、此処にいる地上を思う。

桜と風邪

四月だった。土曜日の夕刻、米子から帰つたばかりの新と、保育園に竣ジンを迎ジョンに行く。満開の桜が散り掛かり、風邪を引き始めていることが、自分でもよく分かつた。歩いているとふらするのだつた。新が竣と手を繋いで、竣がトコトコ歩いて行く後ろで、私は痛み出した身体を引き摺るようにそつと歩を運んだ。花びらを舞わせる微風にさえ、身体はぞくぞく痛むようだつた。夕食を三人で終えると、抽斗ひきだしを探してみたが、市販の薬も処方薬も見当たらなかつた。新はそのまま、また私の両親の家に行つてしまつた。私は氣怠けだるかつたが、さつと竣を風呂に入れると、彼と二人、早目の眠りに就いた。ミンジュはまだ画塾から帰つて来なかつた。

眠りの中で気付くことがある。或いは、気付く感覚の夢を見ているのか。DVD。二歳の竣がテレビに向かつて、エンドレスにディズニーのDVDを見ている。或いは、これは夢ではなくて、私は実は覚めているのだろうか。液晶がぶわっと膨れて、画面の中の牙を剥いた悪魔が、

竣に襲い掛かる。画面のガラスが割れて、大きな破片が竣の頭をぱりんと包み込もうとする。目覚めると大抵、自分は寝汗を搔いている。

目覚めると、寝室の明かりが点き、その耿々と灯つた明かりの下でミンジュが着替えていた。私が声を掛けると、「あれ、起きてたの？」と彼女が言う。それから私たちは翌^{あく}日の話をした。日曜日は午後から雨の予報で、私たちは花見に出掛ける積りだつたが、その予定も怪しかつた。私の風邪もあつた。私は布団の上に起き直り、重い体を洋服箪笥に凭せていた。竣は子供部屋で眠つている筈だつた。台所に行つて水を飲み、ミンジュが着替え終わると、明かりを消して再び床に就いた。明日、雨になるならば、と私は思つた。明日、雨になるならば、桜は全て散るだろう。布団の中で、ミンジュの手が私の手にそつと触れた。私は戸外の桜を思った。森閑とした中、それは今もなお花びらを暗がりに散らしている。私は彼女の手をぎゅっと握り返した。そこには確かな温もりがあつた。

日本なのか、韓国のかは、はつきりとは分からない。歩道を、トコトコと子供たちが歩いて行く。その上に満開の桜が散り掛かる。私は彼らの後ろで一人立ち止まり、ゆっくりと深呼吸した。恐らく、この夢の中では、私の風邪は既に完全に治り切っていた。